

# 新幹線の「安全神話」守れ

六月末、山陽新幹線の福岡トンネル内で側壁のコンクリートが崩落した事故で浮かび上がったトンネルの劣化問題はその後、高岡橋などにも及んでいることが分かった。新幹線の「安全神話」に真実号がともりかけていると言わねばならない。

福岡トンネルでは重さ二百キログラムのコンクリート塊が、時速二百キロで走っていた新幹線の屋根を直撃した。幸い乗客などにはけがはなかったが一步間違えれば大惨事になるところだった。

事故要因の一つに「コールドジョイント」がある。コンクリートを通し込む作業時間のずれなどで新旧の部分のつながりが悪くなる現象だ。この事故で技術者は大ま

な衝撃を受けた。それまでコールドジョイントが事故に結び付くという認識はなく、全く想定外の事故だったからだ。

JR西日本は事故後、百四十二本すべてのトンネルを緊急点検し九十三本から二千四十九カ所のコールドジョイントを見つけた。そのうち九七%は、昭和四十年代後半に工事が行われた岡山以西に集中していることが判明した。ここに構造的な欠陥があることをうかがわせている。

の心配はないとして事実上の「安全宣言」を出している。

だが、それは当座の安全確保であって、事故原因まで解明されたわけではない。鉄道総合技術研究所(JR総研)はトンネル壁崩落は「コンクリート接合不良部であるコールドジョイントの存在と、その下部の壁に強度が不足した個所があったことが重なり、列車の振動などが引き金になって落下した」としている。なぜ強度不足の個所ができたのか。この疑問こそ急がなければならない。

今回の補修はあくまで応急処置であり恒久的な補強、補修工法の開発も進める必要がある。

問題はトンネルだけではない。高架橋からもコンクリート片落下が相次いでいる。

十九日には「アルカリ骨材反応」と呼ばれる内部劣化の被害が橋げたなど二十五カ所で発生していることも分かった。コンクリートのがん、ともいわれている。

同新幹線の場合、海砂使用による

りコンクリートに含まれる塩分濃度が異常に高いことが既に判明しており、専門家の間ではこのことがアルカリ骨材反応を加速させているのではないかとみられている。JR西日本はこの二十五カ所の補修工事を終え、コンクリートがはがれ落ちるなどの危険はないと強調しているが、いずれにしても、また新たに設備の劣化が表面化したことには変わりはない。

山陽新幹線は昭和五十年に博多まで延伸開業し、本来なら老朽化対策が求められる。

トルコ北西部を襲った大地震で多数の犠牲者が出、懸命の救助作業が続いている。わが国からも国際緊急援助隊が出動し、現地での活動を始めた。

トルコを訪問した高村正彦外相は緊急無償援助六千万と医薬品など物資協力合わせて百五十万の緊急援助を伝えた。国際医療ボランティア・AMDA(本部、岡山市)

する時期ではないはずだ。「無理に無理を重ねた」「地元の要望で夜間工事の制限を強いられた」などと山陽新幹線工事誌に残されている。コンクリートの材料に問題があるのか、施工不良に問題があるのか、原因究明が急がれる。

場合によっては運行を止めてでも劣化原因を突き止め、問題個所の発見、補強工事を行う必要がある。新幹線は欠くことのできない大動脈だ。それだけに万全の安全対策が求められる。

## トルコ地震に強い支援を

が医療チームの派遣を決め、日本赤十字社も救援募金を始めるなど支援の輪が広がっている。

地震の震源となった北アナトリア断層はトルコ北部の東西約千キロを走り、一九三九年から計六回の大地震が発生している。今回の地震は過去に大地震の記録がない「地震の空白地帯」といわれ、発生が心配されていた。

地震の規模について同国のカンディリ気象台は当初発表したマグニチュード(M)6.8をM7.4に修正した。救助活動はがれきに阻まれて難航、震源地のイズミトや最大の都市イスタンブールでは多くの行方不明者がいる。

同じ地震国としてわが国も官民あげて支援の強化に努力したい。人命救助や負傷者の救援は時間との闘いだ。必要ならば国際緊急援助隊の増員派遣を検討すべきだろう。震災後の疫病の発生に備えた防疫活動、電気、水道、ガスなど破壊されたライフラインの復旧にも十分な協力を果たしたい。

将来の復興に向けた政府間の話し合い、両国が進めている地震研究をより推進し、防災に役立てることも大切だ。困った時の助け合いは真の国際貢献につながる。

阪神大震災から四年半になる。わが国では当時の警戒感が薄れつつある。地震はいつ起きるか分からない。トルコの大地震を決して対岸の火事視してはなるまい。

地震の規模について同国のカンディリ気象台は当初発表したマグニチュード(M)6.8をM7.4に修正した。救助活動はがれきに阻まれて難航、震源地のイズミトや最大の都市イスタンブールでは多くの行方不明者がいる。

同じ地震国としてわが国も官民あげて支援の強化に努力したい。人命救助や負傷者の救援は時間との闘いだ。必要ならば国際緊急援助隊の増員派遣を検討すべきだろう。震災後の疫病の発生に備えた防疫活動、電気、水道、ガスなど破壊されたライフラインの復旧にも十分な協力を果たしたい。

将来の復興に向けた政府間の話し合い、両国が進めている地震研究をより推進し、防災に役立てることも大切だ。困った時の助け合いは真の国際貢献につながる。

阪神大震災から四年半になる。わが国では当時の警戒感が薄れつつある。地震はいつ起きるか分からない。トルコの大地震を決して対岸の火事視してはなるまい。

将来の復興に向けた政府間の話し合い、両国が進めている地震研究をより推進し、防災に役立てることも大切だ。困った時の助け合いは真の国際貢献につながる。

阪神大震災から四年半になる。わが国では当時の警戒感が薄れつつある。地震はいつ起きるか分からない。トルコの大地震を決して対岸の火事視してはなるまい。

将来の復興に向けた政府間の話し合い、両国が進めている地震研究をより推進し、防災に役立てることも大切だ。困った時の助け合いは真の国際貢献につながる。

阪神大震災から四年半になる。わが国では当時の警戒感が薄れつつある。地震はいつ起きるか分からない。トルコの大地震を決して対岸の火事視してはなるまい。